

【講演会】

永平の風

——道元の生涯とその仏法——

大谷 哲 夫

皆さんこんにちは。ただ今ご紹介を賜りました大谷でございます。本日は、雨模様で、大変蒸し暑い中にもかかわらず、よくお出かけ下さいました。ここにご参加下された皆様は一般の方々も多いと伺っておりますので、なるべく分かりやすいような形でお話しを申し上げます。二年ほど前になりますでしょうか。私は、道元禅師の生涯を『永平の風』と題して小説風にまとめて出版させて頂いたのですが、なぜそのような形でそれを書いたのかということをよく聞かれます。そこでまず、それを書くに至った動機からお話しを申し上げます。

この愛知学院大学もその傘下になりますが、わが国の仏教には、曹洞宗という禅宗の宗派があります。その初祖が

永平の風（大谷）

道元禅師であることは、皆さんよくご存知のことであろうと思います。道元禅師がお生まれになって八百年の慶讃事業を行い、それを、昨年大々的に行われた七五〇回という大遠忌に繋げていこう、ということが三年前に曹洞宗で企画されました。その時、ちょうど私が座長に任命されたのですが、その最後の仕上げに道元禅師のシンポジウムをどこかでやってみようという議論になってきたのです。宗門の有識者や両本山の国際班の皆さんと、欧米でやったらどうか、アメリカでどうだというようなことになりました、結局は米国のスタンフォード大学で開催することになりました。

皆さんご存知だと思いますが、スタンフォード大学はカ

リフォルニアのシリコンバレーの近くにある大変有名な大学です。ゴルフのタイガーウッズが中途退学した大学で、アメリカの大統領が多数出ており、当時は、クリントン大統領や国防長官の娘さんたちが在学しているといわれておりまして、いずれにしてもキリスト教の伝統校ですが、敷地はこの愛知学院よりかなり広く、構内には米国の有名デパートまであるという、地平線までずっと大学という極めて広大な大学です。

そこで道元禅師のシンポジウムが行われました。七百人ぐらい入ると思われるクレッギーホールが、二日間にわたって超満員でした。「アメリカの禅というものも、もうそろそろ日本から独立してもいい、日本から乳離れをしなければいけない」というある教授の言葉で締めくくられたシンポジウムでした。我々主催者側もスタンフォード側も、「これは大成功である。道元禅師がこれ程知られているとは思わなかった。禅というものがこれ程アメリカの社会で認知されているとは思わなかった」などといって意気揚々と引き上げてきました。

ところで、私はそれ以前、『おりおりの法話』という本を

出していました。これは道元禅師の語録である『永平広録』を訓読し現代語訳し解説を付したものです。それについて、産経新聞の読書欄に、まず、沢木耕太郎さんの『深夜特急』という本の中で、米国の男性が日本の青年に「禅って何ですか」と問いかける話が紹介されています。その青年は、多少は禅を勉強していたものですから、禅の歴史をとうとうとしゃべり出しました。するとその米国の男性がまた言うのです。「そういう禅の歴史は本を見ればわかりますよ。だけど、禅って何ですか」と。その青年もこれには窮してしまった、というようにことを前言として、「日本で発達した禅は今や世界に広がり、昨年は米国スタンフォード大学で「道元禅師シンポ」が開催されるまでになった。だが、真意のよく分からないやりとりを禅問答という。今年は曹洞宗の開祖道元禅師が生まれてちょうど八百年になる。本書はその道元禅師の上堂での発言をまとめた『永平広録』を中心として原文・訓読・語義・訳文と読みやすい編集をしている。この『永平広録』の上堂は、悟りにについての真つ向からの問いかけで、これを謎かけであるなどとして頭だけで理解しようとする甚だしい曲解を生む。そもそも「不

立文字」とされる禅の本質を、この本を一回読んだだけで「完全に理解できた」などといったら「只管打坐」によってさとの境涯に達しようとしている人に対して失礼極まりない。同書の正しい読み方といえ、やはり完全に理解したいという仏法への想いを喚起させることであろう」という書評が載っておりました。

そして、さらに私自身にもこういうことがありました。大学院時代に私は『正法眼蔵』を学んでいたわけですが、恩師に、「『正法眼蔵』って難しいですね」と言ったことがあります。私は、恩師が「難しい」と言ってくれることを期待して言ったのです。ところが恩師は、「えっ？ 何です、それは？ 『正法眼蔵』のどこが難しいのですか。あんなに懇切丁寧に書いてあるのに何が分からないのですか」とおっしゃったのです。それで私は、不遜にも世の中にはこの難解な『正法眼蔵』を分かっている人がいるのだと気づかされ、『眼蔵』を徹底的に読みこなそうと決意したという記憶があります。

とにかく、私自身にもそのようなことが背景にあって、道元禅師のシンポジウムの報告会をしたのです。その懇親

会の席である人が、小説家や、放送作家、映画監督や、脚本家の人たちもいたのですが、「そんなふうには道元禅師シンポジウムが行われて、意気揚々と帰って来ているようだけでも、私たちは道元禅師を詳しく知りませんよ。日蓮さんや、親鸞さんは知っています。法然さんもなんとか知っています。だけでも道元さんは只管打坐ばかりでどんな人か分かりません。第一小説にも映画にもなっていないじゃないですか」というようなことを言われました。だから、私は「道元禅師が生まれた一二〇〇年代と今の時代というのは、閉塞感が漂い、同じような雰囲気を持っている時代です。そこで自己を確立した人が道元禅師なのです」と申し上げました。すると、「それならそれを何かに書いてくれ、私たちは学問の世界の道元を求めているのではない。難しい話などは聞いてもそんなものはすぐ忘れてしまうけれども、もっと易しく我々向きに書いたものを見れば何とかなるのだ」とおっしゃいました。私はその時ちょうど副学長であったものですから、「いや、いや、それは忙しくて駄目だよ」と言いましたら、講義ぐらいいはできるでしょう、ということ、それから土曜日の午後一時から、場合によつ

ては夜の十時ぐらいまで雑談まじりに講義したことがあるのです。そうしましたら、それを聞いていた人たちが道元禪師は面白い、何とか、また講義をまとめて書いてくれなにかと言うのです。私は、当然、駄目だと言いましたが、その話を録音していた人がいまして、それを基に書けばいいのではないかと、さんざんに頼まれましたので、これはやむを得ないなと思いました。そして、時期的には、ちょうど道元禪師のご生誕の慶讃の事業もほぼ終わり、七五〇回大遠忌も間近に迫っている。その時に、道元禪師の末孫の坊さんのはしくれとして一体何ができるのだろうか、駒澤大学という狭い学問領域の中では何とかやっている、しかし、この時期に、真剣に禪を求めている、知りたいと願っている人たちに、何かできないだろうか、仏教用語を駆使してではなく、一般の人々にわかる用語で、現代の言葉で、道元禪師の存在とその仏法を知ってもらう必要がある、とは常々思っておりまして。ですから、大変失礼ながら、ここにご参集して下さっている大学院の学生の方々、それから禪を学んでいる方々は、道元禪師の存在とその仏法についてはある程度は分かっておられる。けれども、一般の

大多数の方々は道元禪師を知らないと思う。どうでしょうか。そうしたことが『永平の風』という本の根底にあるわけです。

今、皆さんのお手もとにお配りしてあります「永平の風——道元の生涯とその仏法——」という二枚綴じのものが、私の創作ノートのメモといったものです。実際はそのノートだけでも大学ノートで二十冊ほどになっていますが、そちらには道元禪師の一生の中のエピソードメイキングな部分を抜き書きしてあるということなので、参考のためにご覧いただければと思います。大学の講義ですと恐らく三十五回から四十回ぐらいの分量になります。ところで、ものを書く時には、私は道元禪師という称号を使いますが、今日は禪師を省かせていただきますのでよろしくご了承いただきたいと思えます。

今日は時間も限られておりますので、道元のご生涯とその仏法のすべてをお話しするわけにはまいりませんけれども、まず、最初に、『永平の風』をどのように書いていったかと申し上げますと、一昨年（二〇〇一）の四月、ちょうどイチローがメジャーでヒットを打ち始めた時期です。私

は野球が大好きでありまして、今も駒澤大学の野球部長と東都野球連盟理事長を兼ねておりますが、イチローのことが非常に気になって、アメリカへ行つて打てるか打てないかということは私の大関心事でありました。三割・十五本ということをや野球部のメンバーと話したこともありまして。そこで、試合の録画をしておきまして、彼が一本打つ度に三十行から五十行は書くというような馬鹿なことを心にきめて書いていました。そして、ちょうど一昨年の今頃には、ほぼ書き上げて『永平の風』と題し、その筋立てを、皆さんよくご存じの、「春は花 夏ほととぎす 秋は月 冬雪さえて 涼しかりけり」という道元の歌にちなんで、第一章花・第二章ほととぎす・第三章月・第四章雪として仕上げました。それが、今皆様のお手もとに大きな題目として掲げてあるわけです。これを時系列的に考証し、諸々の資料や文献と照合し、また、出版社の方から「こんなに多くては出版しても二冊本になって今ではとても売れません。一冊に削ってください」と言われ、余分なところはかなり削ぎ落としてしまいました。

よく、道元の生涯には劇的な場面が少なく、只管打坐ば

永平の風（大谷）

かりで、映画にも小説にもならないと嘆かれます。が、それは同時代を生きた法然、親鸞、一遍、日蓮といった人たちとの仏者としてのあり方の違いであると私は思います。求める道の違いといってもよいかと思えます。ましてや、映画や小説になるものが一概に劇的というわけでもありません。この道元のはてしなき求道の旅路、この只管打坐の世界では、その生まれや俗世間などの生臭い事象というのは関心の外になり、後代の私たちから見ると、その生涯が同時代の諸師方に比べて絵になる場面が少ないというのは当然であろうと私は思っております。しかしながら、この道元の著作である膨大な『正法眼蔵』、また、中国留学記であります『宝慶記』、それから、道元に生涯にわたって随身をした懷妊の『正法眼蔵随聞記』、また、私が専門とする、懷妊、詮慧、義演ら道元の弟子たちの編集した道元の語録である『永平広録』、そして、道元の数々の伝記類、更に道元の同時代の文献、その周辺を詳細に追っていくと、その時代に生きた道元の姿が浮かび上がってきます。

私は、ことさらに人間ということを強調する人間道元であると人間親鸞であるとかいった言葉はあまり好きでは

ありませんが、先程言いました通り、鎌倉時代という現代に通じるような閉塞感と混迷感の漂う時代に、正伝の仏法というものを己の中に確立し、日本に根付かせていったその道元の姿がドラマでないはずがないと思っています。ことに、道元の真実の師匠となる正師天童如浄に出会うまでの、先輩僧たちを徹底的に否定し続けていく旅路での心の葛藤とその精神の軌跡というのは、極めて鮮明なものがあります。ともあれ、道元のはてしなき求道の旅路というのは、ありとあらゆるものを投げ出して仏道を極めるというもので、それは狂おしいまでの憧れに自分自身を明け渡していくところから始まります。そして、それを具現化するために、道元は必死に尋師訪道、師を尋ね道を訪ね、自己という存在を確かに認識し確認する方向に向けた終わりのない旅を続けていきます。

その生涯はまさに風のごとく痕跡を残しません。禅の世界では没蹤跡もちゆうせきといえます。また、禅の悟りの世界では鳥道ちようどうという言葉も使います。例えば、A地点からカアカアカアと鳥が鳴いてB地点へ行く。行つたということはわかりません。ところが、空には痕跡が残っていません。これを

鳥道というのですが、それが悟りの世界であるということ象徴的にいうわけで、そのような事象が展開されていったということになります。しかしながら、今やその道元の仏法というのは、時空を超えた風となって洋の東西を問わず、現代に生きる人々を魅了しているといっても過言ではありません。ですが、その生涯をドラマとして描き出そうとすると、道元にはどうでもいいようなことにも光をあてていく、ということに視点を定めていかなければならないわけです。ところが、その文献上に現れている事象や伝説や異説を取捨して道元の真実に近づけていくということは、まさに没蹤跡の世界ですから誠に困難な作業でありました。

私自身、自信のあるところもあればないところもあるわけですが、道元の周辺に点在している伝説や風聞などを活用しながら歴史の事実近づけ物語を進めていこうとする時、決まって夢の中で、「おいっ！ それは違うぞ！」という声はどこからともなく聞こえてきたことが幾度となくありました。出版社の人に、『永平の風』の中に登場する人物は二百数十人いますと言われ、私自身もびっくりしましたが、「おいっ！ それは違うぞ！」と言ったのは、特に

自分を投げ捨てて道元に師事し、只管打坐の世界に没入した名もない人たちの叫びであったのではないかと思うのです。私が、その時代のことを現代の視点だけで考え、誤りを書いてしまったのではないか、その警告ではなかったのかと今でも思っています。が、道元が語らなくてもその門下に透けていた事実というのがあるはずです。これを道元禪師七五〇回忌という大遠忌を機会に、その遠孫として何とか道元を蘇らせ、道元を知らないという人たちに、道元の生きざまが、そしてその仏法が少しでも分かるようになってきたら、という強い思いに突き動かされて書き上げたということでもあります。

さて、道元の求道ということになりますと、皆様方一人ひとり感じていると思いますが、人の一生というのは好むと好まざるとにかかわらずその時代背景や環境がついて回ります。特に道元の場合はそれが強く作用しています。皆さんは、清々しい道元、孤高なる禅者、政治に関与しない道元というようなことをよく耳にしたいと思います。このことは、両極なのですが、私は道元の五十四年という生涯の中で、その生まれの影響というものがかなり大きな位置を

永平の風（大谷）

占めたからであると思っています。というのは、道元のお父様は、異説もありますが、源通親みなもとのみちちかという方で、お母様は、藤原基房ふじわらのもとよきの娘伊子いしという方です。源通親は京都の宮廷政治を牛耳っていました。村上源氏の系統です。ですから、「平氏に非らざれば人に非らず」といわれた時代が終って源氏の世になり、その時、京の天下の中樞を担っていたのが源通親なのです。鎌倉には、一一九二年に幕府を開いた源頼朝みなもとのよりともがいるのです。京と鎌倉、この公と武が覇を争っているのです。東の頼朝にとつてみればこんな目障りな男はいません。天下を取ろうとしている男の邪魔をしているのが西の源通親という人です。この人は、権謀術数に極めて優れた才能を発揮した人です。また、藤原基房は、過去三百年続いた藤原関白家の家系です。伊子は絶世の美女といわれ、ゆくゆくは天皇の后といわれた人ですが、運命のいたずらで、平家を打ち落とした木曾義仲が入って来た時に基房に押しつけられ正室になりました。その後、その木曾義仲が亡くなり、また藤原基房の下にいましたが、基房の計らいで今度は通親と結婚させられました。昔は結婚といつても、生活を共にし、一緒に住んだわけでも何でもな

永平の風（大谷）

いのですが、伊子は二度にわたって政略結婚させられているわけで、そのような状態の中で生まれたのが道元ということです。

この藤原家と源通親家つまり久我家というのは、その当時の貴族の中でも大変に優れた家系で、したがって当時の教養人のトップレベルであったのです。例えば、通親という人も宮廷政治の上での権謀術数のみの人ではありません。和歌は六条季経のつねに師事し『千載集』や『新古今和歌集』に和歌が載せられている歌人でもあるのです。駒澤大学図書館長の林達也教授が和歌の専門でもありますので調べてもらったのですが、通親の次男で、道元の腹違いのお兄さんにあたる、後に道元の育ての親つまり育父いくふになる通具みちぐという方がいますが、この通具という人は藤原定家と並び称せられた和歌の名手で、『新古今和歌集』の選者の一人であり、当時の最高の文人、政治家でもあります。道元は、そういう環境の中で育つのです。そういった環境がその人の人生に深い影響を与えないことはありません。

そういう時代に頼朝が橋供養に行き、落馬して亡くなります。そして道元が三歳の時、今度は父親の通親が亡くな

ります。五十三才の突然死でした。さらに八才の時、母親の伊子も亡くなります。ということは、道元はいわゆる確たる家としての血筋としての後ろ立てを失うことになったわけです。このようなとき、当時の貴族の子たちには二者択一の道が残されていました。今でいう養子である猶子ゆうしとして家を継いでいくか、出家をするかです。そんな中、これは伝説的にもいわれておりますが、恐らくは、その通りで、母伊子の懇願で、遺言といっても良いかも知れませんが、母伊子の弟に当たる天台宗の良観をたより出家をするということになりました。

『永平の風』に詳しく書きましたが、道元が出家した当時は、最澄が開いた天台宗の本山である比叡山は日本仏教界に君臨し、仏教全体を学ぶことができる、現代風に言えば仏教の総合大学という大変な学問所でもありました。しかしながら、道元が学んでいた一二一五、六年から二〇年代まで、比叡山は天台集團の内部紛争がその極に達していた時代でもあり、横暴な僧兵というのもいて、その当時は、いわゆる山門（延暦寺）と寺門（園城寺）の両派に別れて焼き討ち騒ぎを繰り返し、山内も著しく世俗化していたよ

うです。そのような状況の中で、道元は天台教学を学んでいくわけですが、当時は末法思想が流行り、物の怪というのは仏教以外にない。密教的加持祈祷のみが唯一の救いという状況でもありました。ですから、そのような空気に飽きたらずに、時代の波に押されるように比叡山を出て行った人たちがいたということは皆さんご存じのとおりで、道元に先行する人には宋西や法然がおります。そして同時代でやや先行する人には親鸞もいます。例えば親鸞は、九才で比叡山に登って堂僧という下積み（下積み）の生活をし、二十年間比叡山で暮らした後、二十九才で山を降りて法然の弟子になった人です。また、道元の後に活躍する日蓮は二十一才で比叡山に登り、十一年後の建長五年（一一五三）、すなわち道元が示寂した年に比叡山を降りました。

道元が修学を始めた比叡山には、先ほど申しましたように武力で全てを解決しようとする僧兵たちや、修行などそっちのけで外界に降りて乱暴狼藉を働いていた衆徒たちが多くいました。そこまですない僧たちの中にも名利榮達を求める雰囲気（雰囲気）が充満していたのです。そのような状態の中で

永平の風（大谷）

道元が抱いた疑問というのは、日本仏教の原点ともいえるもので、それは「草木国土悉皆成仏」とか「一切衆生悉有仏性」という言葉で表現されております。これは、叡山天台の基本的な考え方とされますが、人間というのは生まれながらにして完成された人格を持っているという、いわゆる本覚思想です。道元は、それに対して、道元の伝記をまとめた『建徳記』の伝えるところでは「顕密二教ともに談ず、本来本法性天然自性身（ほんらいほんぽうしょうじょうてんねんじしやうしん）、と。もしかのごとくならば、三世の諸仏なによりてかさらに発心して菩提を求むるや」と極めて単純明解に疑問を抱いたことを記しています。もともと悟っているものがなぜ修行をするのか。生まれながらに完成された人格を持っているなら、なぜ諸仏はなぜ苦しんでまで修行をするのか、もともと悟っているのになぜさとりを求めて発心修行しなければならぬのか、その修行とはいったい何かという、それは、当時の日本仏教に対する極めて基本的な疑問といってもいいと思います。しかし、道元のこの疑問は、周辺の学僧たちにとっては出家以前の極めて幼稚な質問にしか映らなかつたようです。彼らにとつては、迷いの凡夫までも肯定して、人間は最初

から悟った存在であるというのが当然の考え方であり、それに疑問を差し挟むなどとはもつての外のことだったのでしよう。人間にはもともと仏性があるという考え方を突き詰めますと、その最終的結論は個人の修行体験以外にはなくなりません。つまり、修行僧は自己の修行体験のみに安住することになっていくわけです。そこで、悟っていい方がいいのだが、修行など一切しなくても、自分は悟っているからいいのだという風潮がその当時あったようです。つまり、「わしは悟っているから、わしのやることは全て許される」というようなことを言うわけです。このような「私の所行は全て仏の所行である」という考え方を本覚崩れとか天台崩れといったようであります。また、これに対し疑問を呈しても、答えてくれる人がいなかったというのが現実であつたのでしよう。

しかし、その疑問に対して幾分かの示唆を与えてくれたのが、色々な議論がありますが、栄西であつたと私は思っています。栄西は、元は天台宗の人で密教を深く学んだ人ですが、あの当時に二度も中国に渡つた人です。一度目は一一六八年の四月から九月まで、二度目は二十年後の一一

八七年、その時は中国からどうしてもインドまで行きたかつたようですが、中国の事情でその願いは却下され、日本に帰国の途次、暴風に遭い、中国に漂着し、やむを得ず、前回の縁で天台山に登り、そこで臨濟禅を伝える虚庵懐敏に出会い禅を学び、一一九一年に帰国し、密教との兼修禅を広めた人です。当時、禅の本場は中国で、一二〇〇年代の宋の時代でした。その栄西が、真に禅を極めたいとするならば何よりも本場に師を求めなければならないということを教えてくれたのだらうと思えます。それと同時に栄西が紹介してくれた日本での師となる明全という方と二人で、公武が激突し、日本が大きく変わっていくきっかけとなつた承久の乱（一二二一）が治まつた貞応二年（一二二二）ともに手を携えて中国に渡つてまいります。

さて、遣唐使の時代は、中国に渡る船というのは、どこへ着くか分からないために、四艘の船を丸太で繋いで風のままに流されて行つたようなところがあり、四艘船ともいわれていました。ところが、道元の時代になると、船が潮に流されないような形になり、同時に羅針盤の初歩的なもので、この時代には命が危険にさらされない程度で中

国に渡ることができたといわれています。何月何日に出発して何日に着くという絶対の保障はないのですが、ともかく行つて帰ることはできたようです。だからこの頃、鎌倉幕府は日宋貿易が非常に盛んになっております。道元が着いた寧波にんぱという港で十日の間に銭がすべて無くなったという逸話があります。鎌倉幕府が、銭を鑄造するよりは買ひ取つて来た方が早いということで、寧波の港町で、恐らくありとあらゆる手段で銭をかき集めたいのです。非常に不評をかつたという話が今でも伝えられています。

寧波に着いた時に、禅林で食事の係である典座てんざという職にある老僧が船までやつて来ます。「明日はわが育王山いくおうざんで修行僧たちに麵汁供養するので権茸ごんきうを買いに来た」といういわゆる『権茸典座』の話として知られておりますが、道元がこの典座に「文字とは何ですか？ 弁道とは何ですか？」と質問します。道元はこの時、よくわからないまま禅的な雰囲気というものを感じとりまします。道元にとつてその頃修行とは、坐禅して、経典を読んで、祖録を精読して、それを観念的に頭でとらえ構築していくことしか頭になかったはずです。ところが、その典座によつて、自分に任された、

永平の風（大谷）

炊事に専念するということさえもが、禅の修行の根本であるということは何となく教えられたのです。そういう老僧の態度と道元が頭の中で考えていたことがぶつかり合ったのがこの船上での出来事で、つまり道元にとつての最初のカルチャーショックであつたろうと思ひます。ただ頭の中で考えていることと行うこととの齟齬そごです。

では、道元を目指した、その当時の天童山とは一体どういう所だったのでしょうか。天童山は、南宋の禅宗の五山のうち第二位に位置し、僧数は千名を超え、山を背にした斜面に立地する条件を見事に生かした大伽藍群を有し、境内は階段状に展開していた。伽藍群は山門・仏殿・法堂・方丈を中軸にして、山門と仏殿を横軸とし、その線上に僧堂と庫院を置き、その後方に後架や衆寮が配置されたお寺であつたということです。単に自然の地形に順応しているだけではなく、建物は中軸を中心に左右対象の配置をし、周囲の自然環境に見事に解け合う風情であつたそうです。そこで、道元は数々のカルチャーショックを受けます。船が着いた時に船上で会話をした老典座が、「私は修行を終つて帰る」と言つて尋ねてくれますが、その時に、「この

前もおつしやっていた文字とは何ですか？」と尋ねると、「文字というのは本質をわきまえて、それをきちんと理解することが肝心である」と教えてくれます。「弁道もそうである。その根本もわきまえよ。」というのです。しかし、そんなことを言われても道元は納得できません。それで、もう一度「よくわかりません。老僧の言われた文字の真意とは何ですか。」と問うと、「一、二、三、四、五」という数字を示された。

そこで、皆さん、道元は日本人です。この典座は中国人です。この会話は何語でなされたのでしょうか。道元は寧波に着いて三カ月遅れて天童山へ入って行きますが、私はその三カ月が問題だと思っています。というのは、『正法眼藏隨聞記』によりますと明全と中国へ行くために方語も習つたと見えます。方語というのは地方の言葉、つまり中国語です。どうしてそれが習えたかといえますと、その当時まだ中国にいた榮西のお弟子さんたちが、建仁寺に帰って来て教えてくれたのです。しかし、恐らく日本人であるから人にもよるのでしょうか。道元は小さい時から、当時の

最高な教養環境の中に育つわけですから、当時の教養書である『李嶠百詠』はもとより『四書五経』とくに『詩経』さらに『文選』あるいは『十三経注疏』まで習っていたと思われ、いわゆるの漢文を読み書きする力は抜群にあったはずですが。しかしながら、発音が正確にはできなかったのではないかと。私はそれを、船上で三カ月かけて習つたと思っております。そうでなければ、天童山へ行ってすぐに、僧の序列の問題で天童山の役寮たちと一悶着を起こすことができるはずがないのです。

さて、「一、二、三、四、五」といわれた時に、道元は恐らく本当のカルチャーショックを受けたと思います。一、二、三、四、五という数字ほど文字として確かなものはありません。自分は文字にあまりにも執着してはいないのか、ということをごく気がされたのではないかと。しかし、ますます分かわからないので仕方なく「それでは弁道とは何ですか」と聞くと、老僧は「徧界嘗て蔵さず」ということを言うのです。これは、真実はあるのままにあらゆるところに現れているということです。文字には限界があります。我々の頭の中で考えていることも限界があります。

文字に執着をして知識ばかりを追い求め、文字で培われた知識だけで全てを解決しようとしているところの誤りを突かれたわけです。「そんなことでは、仏の本当の姿は見えてきませんよ」ということをこの典座は教えてくれた。老典座は、文字で表わされた教義や経典だけを理解しても仏の真実は伝わらないという事実をここで教えてくれたのです。ですから、道元は後にこの老典座との出会いを感謝をこめて、「聊か文字を知り弁道を了ずるは即ちかの典座の大恩なり」と『典座教訓』の中で讃仰してやまないということになるわけです。

また別の時、この天童山で暑い中で茸を干している老僧に会います。道元が、「こんな暑い中、ご老体で無理なならずに、そんなことお止めになって若い人にやらせたらどうですか」と言うと、「何を言うのだ。他人は私ではないじゃないか、人がやったことは自分のことにはならない。これは私の仕事なのだ」と言って一蹴されてしまいます。道元がまた「それはよくわかります。しかしながら、どうしてこんな炎天下で苦しい思いをしているのですか」と聞くと、その老典座は怪訝そうに道元を見て、「何をおっしゃって

るのだ。今この時を逃がして一体いつこの仕事ができるのだ」と言われました。

またある時、これは日本ではちよつと考えられないことですが、布が手に入らないから紙でできた衣を着ている僧がいました。故郷にはお金がある人でしたから、ある人が、「故郷に行ってお金をもらい、衣を買って来たらどうですか」と聞いたたら、「いや、故郷に帰るその時間がおしい」と言ったという清貧の求道一筋の僧の話もあります。

またある時は、道元が一生懸命「語録」を見ていたら、「何のために見ているのですか」と質問され、道元が「日本に帰って人々を教化するためです」と答えたら、「何のために人を教化するのだ」と言われます。道元が「衆生を救うためです」と言うと、すかさず「つまるどころそんなことが一体何になるのか」ということまで言われました。このような経験を積んでいくうち、道元は自分自身のやっていることが間違っていないにしても何かはどこかが違っているのではないかと何となく気づかされていきます。

また、カルチャーショックと言えば、ここにおられる僧侶の方々には分かるのですが、頭の上にお袈裟を載いて、

なりません。ところで、道元が中国で巡った場所は、そのほとんどが栄西の歩いた所でした。それは恐らく、明全との約束で、師匠である栄西の供養を兼ねてということがあったと思います。しかし、道元をそのような行動に駆り立てた本当の原因は、嗣書を拝覽することによって到達した、仏の悟りは同じ仏の境地を体得した人によって連綿と受け継がれてきた事実、釈尊の真実の仏法を確実に嗣続している正師に出会うという確信であつたと思います。

振り返ってみますと、栄西によつて初めて日本に紹介されたと言つても良い中国禅は、初めは確実に、全てを超越して存在する心の探求を目指す仏法でありました。ただひたすら坐禅をして、そこに生ずる心境を仏としてその心を掴むことこそ真の悟りを得るといつた従来の仏教にはない新しい宗教観を持つていたと思います。恐らく、日本の平安末期から鎌倉の初期にかけての、あの世への往生成仏やこの世での加持祈祷などおよそ無縁のものであるという新鮮さがあつたことでしょう。禅のそういう主張に道元が惹かれたのは当然の成りゆきであつたのではないでしようか。

永平の風（大谷）

さて、そうして正師に出会うことを目指して旅を続けていくわけですが、その時代は、日本では元仁元年（一二二四）、北条義時が死に泰時が執権となつた時代です。皆様方の頭の中にちよつと思ひ浮かべていただきたいのですが、昨年か一昨年でしたか北条時宗というNHKのドラマがありました。あのドラマの五十年前ほど前と考えていただければわかるかと思ひます。この年の八月には再び専修念仏の禁止令が出されたり、五十二才になつていた親鸞が『教行信証』を著した時代でもあります。

結局、道元は何とかして正師にお会いしたいと思ひながらできなかったのですが、道元の本当に求めていた師というものは、どうも大梅法常（七五二〜八三九）という方に代表されるようです。この人は馬祖ばそという人のお弟子さんで、法常が「仏とは何ですか」と聞くと、馬祖は「即心即仏そくしんそくぶつ」つまり、心こそが仏にほかならないと答えます。そこで、法常は大梅山に入つて、蓮で編んだ衣を着て日夜坐禅をし、三十年間過ごします。その間、王臣に知られず、檀那たちの接待に決して行かなかつたといひます。そうしたある時、馬祖門下の塩官齊安えんかんさいあん（？一八四二）の弟子のある僧が道に

迷い、偶然、大梅に出会い尋ねます。「和尚は、馬祖大師のお弟子さんとお見受けいたしますが、馬祖大師からどんなことを学んでこの山に籠もっているのですか」。そう尋ねられた方常は「即心即仏と教えられた」と答えます。するとその人は、「いや、この頃の馬祖さんの仏法は違いますよ。近頃は非心非仏と言っています」つまり、心や仏にとらわれるなど言っていると言うのです。すると、大梅法常は「あの和尚め、まだ人を騙くらかしているのか。非心非仏、大いに結構、でも私は、あくまで即心即仏である」と言ったのです。その人が帰って馬祖大師にそのことを伝えると、馬祖は呵呵大笑して、「おう、梅の実が熟しているな」と言ったそうです。

道元はこの大梅法常の任んでいたという所に行き、大梅が頭の上に乗せて坐禅をしたという鉄の塔があるのですが、それが残っていたということがあって、道元が感激に浸り、大梅に想いを馳せ、もはやこういう人は中国にはいない、もはや中国には正師はいないのかという無念のうちに坐睡しました。坐睡というのは坐禅しながら眠り込んでしまうことです。が、その夢に現れたのがこの大梅で、大梅は開

花した梅の一枝を道元に授けたのだそうです。

これに感激して、道元は何とか気もちなおし、正師を求めなければならぬと思ひなおります。正師を得なければ何のための参学か。嗣書の中に古今を通じて一貫して流れている仏祖の命脈というものを自分自身が仏祖となつてそれを弟子に継がせるということが一番大事なのだから、それをしなければ何のために自分は正師を求め、こんな中国までやって来たか意味がないじゃないかと思ひ返すのです。そして、天童山へ戻つて来た時に、天童如浄に出会うことになりました。

天童山に夏の風が渡っていた頃です。宝慶元年（一二二五）五月一日のことでした。道元が焼香礼拝して方丈に入ると、黒い衣に濃い茶のお袈裟を付けた老僧が端正に曲録に座っていました。道元にとっては強烈な印象だったはずですが。なぜなら、今まで巡つて来た住職たちはみんな金襴のお袈裟をかけていたからです。この天童如浄は黒い衣に濃い茶の袈裟という姿ですつと座っていました。方丈の深閑とした中で古仏が道元を見、道元は如浄をしつかりと見上げて、道元は古仏に見られているという実感を持ったの

です。道元は瞬時に如浄に正師を見出ししました。如浄の方も瞬時に道元の器量を見抜き「仏々祖々の面授の法が成つたな」と言いました。面授というのは、面と面を突き合せて人と人が目の辺りに相見することによって法が伝えられることを言います。如浄も、恐らくその師である明全から道元の評判を聞いていたのでしょう、「希代、不思議の奇縁……」という言葉を使って大いに満足します。仏々祖々の面授の法が成つたという言葉の中に如浄の期待の大きさが、道元にひしひしと伝わって来た瞬間でした。私は、この場面を「宝慶元年の巡り会い」と名付けておりますが、この巡り会いがなければ今日の道元の「永平の風」というのは吹いていないはずで、この道元の、正師への巡り会いが、道元にとって一番重大なところでしょう。

この如浄と道元の間、面授というのは、お釈迦様が靈鷲山で説法をなされた時、優曇華を一本捧げると摩訶迦葉ひとりガニツコリ笑つたという話、拈華微笑の世界などにも通じる世界がそこに現出されました。「正師を得ざれば学ばざるにしかず」といいますが、思えば長い長い旅路でありました。先程も言いましたが、道元の正師を求

永平の風（大谷）

める旅路というのは、自分の目の前に現れてくる先輩僧たちを全て消し去っていく旅路でした。法を嗣いでもいいと言ってくれた人さえも焼香札拜して過ぎてきました。しかしながら、今、全てを託すことができる正師が目の前に豁然として現れたわけです。この如浄との相見こそが、道元に決定的な示唆を与えるわけです。ですから、長かった尋師訪道の旅路、長き心の遍歴、長き心の懊悩、長き心の葛藤、それら全てが道元から消え、正師に巡り会えたという喜びで満ち溢れていきました。

それでは、天童如浄という人はどういう人であったのでしょうか。如浄は、その当時にあつては数少ない古風な禅風を残す中国曹洞宗の法を嗣いだ禅僧で、自ら一家を成していました。皇帝から紫衣を賜つてもそれを断固として拒絶した人で、その当時朝廷に支配されたお寺の中で一途に求道に徹した人といわれています。ただ、中国禅宗史上の中ではそれ程目立つ存在ではありません。当時、確か六十三歳であつた如浄は、自ら率先して夜は午後十一時頃まで坐禅を続け、朝はまだ暗い午前二時半頃には既に坐禅していたそうです。

道元は、自分の全てを投げ捨ててこの人に追隨していきます。老いたりといえども如浄の弁道は尋常一様のものでありません。誰も、如浄が横になって寝たところを見たことがないそうです。如浄は、大衆を前にして言うのです。「私は、十九才の時から一日一夜も坐禅をしない日はなかった。住職となる前から故郷の人と話などしたこともない。それは坐禅のための時間がおしいからである。修行中は自分の足を止めた僧堂から出たこともない。老僧や役寮たちの所へ行つたことなど決してない。ましてや物見遊山などとんでもない。そんな修行の邪魔になることなどしたこともない。禅堂、あるいは坐禅のできる静かな高い建物の上や物陰を求めて坐禅した。いつも坐禅をするための坐蒲を持ち歩いて、時には岩の上でも坐禅をした。私は、釈尊の極められた金剛座を坐りぬくのだという気概を持つて坐禅した。時には尻の肉が爛れ破けることもあったが、そういう時にはなおさら坐禅に励んだ」。如浄の声は、あくまでも静かであったが、この坐禅をその当時の天童山の修行僧に課したのです。坐禅中に居眠りでもするようなことがあれば、如浄は自分の拳骨や履いていた木靴ですさまじい勢い

でなぐりつけ、蠟燭を煌々とつけて眠気をさませたといえます。しかし、この如浄のあまりにも厳しい参禅の仕方に、修行者、特に役寮から不平が続出し、侍者が「坐禅の時間を短くしてください」と伝えると、如浄は「無道心のものが僧堂で坐禅をすれば坐禅の時間などいくら短くても眠る。本心に道心のあるものはいくら長くても喜んで坐禅するものだ」と言つて一蹴したといえます。

しかし、ある時、如浄は「私は、年老いた。そろそろ草庵を結んで老後の生活に入つてもいい。しかしこの寺の住職という責任ある地位にある以上、修行者諸君の迷いをさまさねばならない。諸君の仏道修行を助けるために、私は叱りつけたり、怒鳴つたり、拳をふるつたり、竹篋で君たちを打ちのめすことも敢えてする。だが、こうしたことをするのは仏の子である修行者諸君に対して大変に申し訳なく、誠に恐れ多い。このようなことはしたくはない。しかし、これは私が仏に成り代わつてすることである。それゆえに、修行者諸君、どうか慈悲をもつて、慈悲をもつて許したまえ」と言つたといえます。その後、この僧堂の修行者たちは、如浄の慈悲あふれる誠実さに感動し、如浄に打

たれることを喜びとしたと言います。それまでの天童山の宗風が一変していきます。これは、私が書いたわけではなく、『正法眼蔵』に書かれてあることを私が訳出しただけの話です。ですから、道元はそういう人の下で本当の修行のすごさ、人間のすごさというものを肌で感じ、「たとえ厳しい修行で病気になるって死ぬことがあるうともこの師の下でひたすら坐禅に励もう」と決意するのです。

そんな時、道元が、師匠と仰ぎ日本からともにやって来た明全が四十二歳で亡くなります。明全の無念さはいかばかりのものであったのでしょうか。道元は、明全の無念さをかみしめながら茶毘に付し、三百六十余りの骨を拾いあつめます。道元は、後日、それを日本に持ち帰り、建仁寺の開山堂の横に埋めました。今でもお墓があります。さて、明全が亡くなると、中国へやってきた責任の重さというのが急激に道元にのしかかってきたと言つて良いのではなんでしょうか。道元は、如浄の下で参禅に励めば励むほど、さまざまな想いや疑問が去来し、それらの一つ一つを解決するためにはどうしても正師如浄に直に教示して貰うほかになく、その想いが日増しに強くなり、遂に書状をもつて破

永平の風（大谷）

格の個人指導といったものを願ひ出ます。それに対する如浄の返答は「道元よ、君は今から後、昼夜を問わずいつてもよい。お袈裟を着けようが着けまいが、方丈に来て仏道について質問してよい。私は父が子を許すようにして君を迎えよう」という慈慮あふれるものでした。それからというものの、道元は寸暇を惜しんで如浄の方丈を訪れ、疑問とするところを尋ねることになります。それは「教外別伝」のことから、日常の過ごし方、坐禅仕方にいたる、非常に事細かなことにまで及びます。道元は、後にそのやりとりを『宝慶記』^{ほうけいき}としてまとめております。が、これは、道元の唯一の入宋記録とも言えるものですが、これは純然たる求道の記録ですから極めて実地的な修行に関する問題に限られ、それは実に四十項目に及びます。

そして、明全が亡くなって一カ月半後の宝慶元年（一二二五）の夏安居も終わりに近づいたある日の明け方の坐禅の時です。道元の隣で居眠りをしていた僧に向かつて、如浄が、「坐禅は一切の執着を捨ててしなければならぬというのに、居眠りをするとは何事か」と大喝をし、履いていた木靴を脱いで殴りつけました。その傍らで坐禅に没頭し

ていた道元は、この如浄の一喝を聞いて豁然と大悟に至るのです。如浄のこの一喝が、道元の身体を突き抜けました。道元は時空を超越し、その瞬間、まさに自分が諸仏となつて無限の境地を飛翔したのです。それまで自分の心をはがんにがらめにしてきた肉体と心が諸仏とともに軽やかに乱舞し、今まで、自分の眼の前に厳然と立ちほだかつていた全てのものが道元に語り出したのです。道元は、本当の仏のとなつたのです。道元は確信したはずです。これが如浄の言う「身心脱落」である、と。そして、道元は、夜が明けのを待つて如浄の方丈を訪れます。如浄は既に分かっています。が、何のための焼香かと聞くと、道元は「身心脱落いたしました」と答えました。私の尊崇する鶴見大学の高崎先生は、かつて心は塵だと言うので、私は「先生、塵じゃないと思います」と食つてかかったことがあります。が、「身心脱落」です。自分を束縛していたあらゆる執執、束縛、煩惱などから抜け出て捕らわれない世界、無碍の世界に至つたそのときの心境を報告したわけですよ。

これを聞いた如浄は頷きながら、「身心脱落、脱落身心」と言います。坐禅の究極においては我々の身心は既に身心

を離れ、身心は脱落以外にはないということです。そして、道元のこの境地を認めたわけですよ。道元が「自分の悟りの境地は本物であるかどうかをどうか点検してください」と頼むと、如浄は、「印可はおろそかに与えるものではない」と厳肅に答えます。道元がなお「おろそかに印可しない」というのはどういうことですか」と聞くと、如浄は「脱落、脱落」というのです。これは身心が脱落したということすら忘れてしまいなさいという意味で、道元の大悟を認証したということになるわけですよ。そして、大悟の日から二ヵ月程たった宝慶元年（一二二五）の九月十八日に至つて、方丈において道元に「仏祖正伝菩薩戒脈」が如浄から正式に授けられることになるわけですよ。

十四才にして大乘仏教の中心思想が内包していた矛盾に目覚め、比叡山を離れて新たな求法の道を進んで来た道元の目的がようやくここにおいて達成するということになります。道元は、後にそれを「一大事の因縁、ここに了畢す」と書き記します。しかしながら、さとりを開いたからと言って、そこですべてが終わりというわけでは決してありません。道元が、出家し比叡山時代から抱いていた疑問は、先

程言いましたように「本来ほんらい本法ほんぽう性しょう天然てんねん自じ性じょう心しん……」ということから、そこから問いつめて「人は生まれながらにして仏であるとしながら、なぜ修行しなければならぬか」という疑問になったわけですが、この「身心脱落」ということで、確かに人間には生まれながらにして豊かな仏性が具わっているが、その仏性は修行しないことには実現せず、さらに、例えばその仏性が実現したとしても、それを実証しなければ確かにそのとおりであるということが体認、つまり体で認証されていかないわけで、道元は、修行そのものが、そのままさとの証なのであるとして、「只管打坐」を標榜します。

それは何故かと言うと、普通、一般的な考え方では、修行とさとりは全く別物としますが、道元は、正伝の仏法においては、修行とさとりとは全く一つである、とするところに基づきます。修行とは「証上の修」つまりさとの上の修行であるから、初心の弁道修行そのものが本来のさとの完全な姿である。それゆえただ修行すべきで、修行のほかにさとりがあることを期待してはならない。それは坐禅そのものが、さとの姿を直接あきらかにする本来のさ

永平の風（大谷）

とりの証拠そのままを示しているからである。さとりは、もともと修行とともにあるのだから、修行に限りがないように、さとりにも終わりが無い。それなのに、修行とさとりは別物であるとして、修行はさとりを得る手段であるとか、また、さとりを目的とした修行は誤りである。修行そのものが、そのままさとの証なのであるとして、道元は、「仏法には修証これ二等なり、いまも証上の修なるゆえに、初心の辨道すなわち本証の全体なり」（『辨道話』）と主張します。が、しかし、そのみでは修行のみしていればさとりなどどうでもよく、修行さえしていればそれだけでよいとも誤解されかねない。そこで道元は、修行とさとりについて、如浄膝下で得た真髓をさらに「不染汚の修証」「不染汚の行持」と表現することになります。これは、帰国後に、立宗宣言とも言える『普勧坐禅儀』によって坐禅の根本義を、さらに『辨道話』によって坐禅の本質を詳述することによって明らかにされていきます。

さて、大分時間も迫ってまいりましたので、皆様方のお手もとの最終ページの最後に「空手還郷」ということが書いてありますが、これについて説明しましょう。

嘉禎二年（一二三六）のことです。中国より帰って来た道元は三十七歳。大悟されてから十年後ということになります。この年の十月十五日、道元は、日本で最初の「上堂」をされます。上堂というのは禅林で、その住職が修行僧に対してする正式の説法を言います。中国禅宗の正式な説法はこの上堂で行われるのです。それでは『正法眼蔵』は説法ではないのかといえますと、これは勿論、説法の一つではありませんが、私はさとりの教科書であると思っております。というのは、道元が帰ってきた時、禅のさとりの実態と申しますか、そう言う概念が、と言うよりは、それを日本語で説明したものは当時日本に全くありませんでした。そこで、それを説明するために、道元は当時の和語を用いてさとりを説いていった、それが『正法眼蔵』です。それとは別に、道元には、弟子たちが編纂した道元の語録である『永平広録』があり、その大部分を占めるのが上堂語なのです。私は、道元の仏法を理解するためには、勿論、『正法眼蔵』は最も大事なもののですが、『永平広録』を無視しては正鵠を欠くと常に主張しているのですが、その件については、またの機会に譲らせていただきます。

さて、「空手還郷」についての「上堂を『卍山本』で訓読してみます。

師、嘉禎二年丙申十月十五日において、始めて当山に就いて、開堂拈香、聖を祝し罷つて、上堂。山僧叢林を歴ること多からず。只、是、等閑、天童先師に見えて、当下に眼横鼻直なることを認得して、人に瞞ぜられず、便乃、空手にして郷に還る。所以に一毫も佛法無し。任運に、且らく時を延ぶ。朝朝日は東より出で、夜夜月は西に沈む。雲收つて山骨露われ、雨過ぎて四山低る。畢竟、如何。良久して曰く、三年、一閏に逢い、鶏は五更に向かつて啼く。久立下座。これを現代語にしてみますと、次のようになります。

道元禅師は、嘉禎二年（一二三六年・丙申の歳）の十月十五日に、始めてこの興聖寺において、祝国開堂され、香を拈じ祝聖されて、上堂されて次のように言われた。

山僧^{わたし}は、あちこちと叢林を遍歴し、その生活を多く経験したわけではない。ただ、はからずも、先師天童如浄禅師に相見させていただいたのみである。しかし

ながら、その場で、眼は横に鼻は真つすぐについているというごく当り前のことを認得しえたのであって、天童如浄禅師に、仏法とはそういうものだとかまされたわけではない。天童如浄禅師がかえって、山僧にだまされて仏法とはそういうものだとか教え示されたのである。そして、つい近年、そこで、手に何も携えずに郷に還ってきたのである。それゆえに、山僧にはいささかの仏法も無い。

ただ、何のはからいもなく、時の過ぎ行くままに身をゆだねているのである。朝な朝なに太陽は東より出て、夜な夜な月は西に落ちて沈んで行くように……。風が止んで雲が消えると山谷のざわめきも静まり山肌が鮮やかに露われ、雨雲が通り過ぎ、雨がやむとあたりの山々が低くその姿をあらわす。つまり、結局のところはどうだというのだ、それこそが仏法の真実のありようではないか。

と、言われて、禅師は、しばし沈黙されておられるから、つぎのように言われた。

三年に一度は閏年が巡って来るものだし、鶏は明け

永平の風（大谷）

方（五更・午前四時頃）には鳴いて時を告げるものだ。長いあいだ立たせたまま、お疲れ様であった、と言われて、禅師は説法の座から下りられた。

これが道元の言われた「空手還郷」の典故です。

しかしながら、この言葉は、一番古いとされる『祖山本永平広録』の一番初めに言われているわけではありません。そこでは順番から言うとう四十八番目でした。では、この「空手還郷」がなぜ道元の言葉としてこのように有名なつたかと言いますと、それは、道元没後十一年、文永元年（一二六四）、寒巖義尹という人が、編纂なった『永平広録』十巻を携えて、如浄禅師の下で道元と同安居であった無外義遠の所へ行き、校閲を求めたところ、十巻本を一冊にダイジェストします。それが、延文三年（一一三五）に『永平元禅師語録』として開版されます。それを『永平略録』と略称しますが、その時一番初め載せられていたのが、『祖山本』では四十八番目であったものがまず第一になっているのです。それ以来、この『永平略録』のみが道元の語録と信じられていたのですが、江戸時代になって卍山道白という人が、『永平広録』十巻本を、それに基づいて修復しま

す。道元禅師には『正法眼蔵』だけでなく、『永平広録』という大部な語録があるということが、これによって知られることになるのですが、これを『正山本 永平広録』と呼んでいます、その一番初めにも出ています。『祖山本』が発見される、つい近年までは、『正山本』しか知られていなかったわけですから、私も含め先輩たちは、道元の最初の言葉はこの言葉だと思っていました。ところが、永平寺にある『祖山本』はそうではありません。詳しくはまた機会があればお話し申し上げますが、この言葉の背景には、そのような事情があります。

さて、最後になりますが、道元の求道の旅路を結論的に申し上げるならば、これは、その都度その都度、目の前に現れてくる先輩僧たちを次々と否定し去っていく旅であったとも言えるでしょう。現代風に言えば、まさに自分の確たる存在を確かめる、自分捜しの旅といっても過言ではないと思います。自分では、どこかで自覚し、確かに分かっているようなのですが、はつきりしない、それが自分自身のポケットの中に入ってはいる。しかし、その存在をはつきりと認識し、確実に自分のものにする事ができない。

つまり、本当の自分自身を探しに行き、そこにはつきりとして自己を確立するという旅路であったということもできると思います。

それから、先程から色々なことをお話しましたが、道元はカルチャーショックを受ける度に感涙にむせんだといいます。感動をして涙を流したというわけです。それを聞いたある学者が、「道元という人は感激屋だからな」と言いましたが、勿論その通りです。ですが、何にでも感激したわけではなく、道元は根本的に、求道についての自分が知らないこと、初めて体験することなどに極めて素直に直截的に反応するまことに鋭い感性を持っていて、そして、そのところを、自分の真実の心の奥から出て来る言葉もつて記しているのです。それは、道元の精神を、全身全霊を震わせるもので、単なる感動ではありません。そうした鋭い感性の持ち主であるからこそ大悟に至り、後に自分自身の独自の言葉で示衆する『正法眼蔵』になり、そしてそれを完結させる上堂語ということになるわけです。

それでは、道元の仏法を一言で表わすとすれば何と言えればいいでしょうか。

過しましたことをお詫び申し上げて、終らせていただく
と思います。ご静聴ありがとうございました。

道元は、鎌倉から帰って来て、その翌日、早くも上堂を
されます。それは、宝治二年（一二四八）三月十四日のこ
とですが、その上堂で、道元は、「明得・説得・信得・行
得」ということを言います。道元は「私が、鎌倉で説いて
きたのは、善行をなすものは一切の迷いを離れてさとりを
開き、悪行をなすものは苦しみの世界に落ちるという事実、
仏法の因果の道理のみである。したがって、まよいを投げ
捨てさとりを得ることが一番重要なことである。そのように
説いたのは、私が、確実に明らかにさとり（明得）、正しく
十分に説明することができ（説得）、明らかに疑いもなく身
につけ信じ（信得）、さらにそのまま、それをきちんと行じ
てきた（行得）ことがあるからなのである」といっていま
すが、これほどに、自分の仏法を簡潔な言葉で表現した人
がいるでしょうか。

さて、では、現代において、我々が道元の仏法をどう受
け継いでいくか。それは道元がそうであったように、果て
しなき求道の旅路を、限りなき求道の旅路を我々も受け継
いで行くということになるかと思えます。

今日は、取り留めもない話になり、時間も少しばかり超